



No. 54

55.1.27

兵庫県赤粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話②2000

# 近世初頭の山崎藩(十五)

島田 清

二、池田輝澄時代(統十四)

## ○ 池田家の家中騒動(一)

元和元年(一六一五)、輝澄が宍粟郡一円、三萬八千石の領主となり、山崎藩を興したのは十二歳のときであった。

その後、寛永八年(一六三一)に弟の赤穂藩主政綱が病歿し、国除された。跡を与えられた次弟輝興は、佐用郡の領所限りその地へ移り、佐用郡は輝澄に加賜されて山崎城下はにわかには膨張した。輝澄は、このとき二十八歳であり、藩領は六萬八千石となった。

幕府は、「家康の外孫」ということで、池田輝政の子

### 目次

近世初頭の山崎藩(十五)……………	島田 清……………	一
史跡鹿沢城趾保存と 公園計画について……………	堀口春夫……………	五
源が谷山崎焼最後の陶工……………	那波鳳翔……………	六
続山崎昭和年譜……………	堀口春夫……………	十
史跡部だより……………	……………	十四

忠継・忠雄・輝澄・政綱・輝興には特に心をつかっていた。しかし、忠継は早く元和元年に歿し、政綱は寛永八年に歿して、残るのは忠雄・輝澄・輝興の三人となった。しかも忠雄は、河合又五郎の逐電に関連して旗本と争ううち、痘瘡を病んで急逝した。寛永九年四月、三十一歳のときである。嫡子光仲はまだ幼く、家督の問題が当然起こってきた。しかし、結局、光仲相続、輝澄後見、ということでおさまった。

その後の輝澄は、山崎藩主としての活動と、池田家宗家の後見、ならびに忠雄遺言の実行と、全く多忙であった。伊賀上野における河合又五郎討取り事件は、この難局の一つを除去したことであり、輝澄の器量も高く評価された。そして、秀忠は、この輝澄に駿河十八萬石を与

え、更に引上げようとしたのであつたが、輝澄が出府の途中、重病にかかり、実現をみぬまま年をかさね、遂に沙汰やみとなつてしまつた。

これから後の輝澄は、ずっと江戸藩邸に起臥し、藩政は家老の手にゆだねられるようなありさまとなつた。

その頃の山崎藩は、姫路・明石の兩藩に次いで播磨第三位の封地をもつていた。城下の賑いもそれを反映してなかなかのものであつた。しかし、これが、一朝にして崩れ去る日がきた。それは、寛永十七年（一六四〇）に起こつた「家中騒動」である。「存採叢書」収載の『夷簡』には、このことを次のように書いてゐる。

寛永十六卯曆、山崎家中ニテ、石丸六右衛門鉄炮ノ小頭ノ銀子ヲ、小川三郎兵衛鉄炮小頭取次ニテ、別所六左衛門小頭に借ス。返弁ノ残、皆済遅々ニ依テ、兩人、小頭六左衛門小頭へ参リ、理不尽ニ皆済ヲ乞、狼籍ニ及ブニ付テ、六左衛門小頭子トモ出合、打擲ニ及ブ。六左衛門小頭ヲ搦捕ル。残ル者トモ逃去。六左衛門、翌日、以使六右衛門へ断有。其元小頭、此方小頭へ参リ、借錢ノ事ニ付、理不尽ノ狼籍ニ付テ、搦捕也。可渡コトヲ問。六右衛門返答ニ、請取コト心得難シ。追テ吟味ヲ遂ゲ、返答ニ及ベシト也。

因之、出入ニ成リ、伊織、四郎右衛門悔シ、語話ス。並、物頭ドモ十一人寄合、可扱コトヲ伊織、四郎右衛門ノ曰。扱ヤウノコト如何、ト問。十一人ノ曰、六右衛門疎忽ノ至也。佗言ニテ可済ヲ云。四郎右衛門ノ曰、扱ハ、兩方ニ難ノ無ヤウノ事、可罷ト云。十一人ノ曰、六左衛門卒爾ニ及上ハ、右ノ外ニ可談了簡ナシ。然ハ、扱ハ不可成ト云。四郎右衛門ノ曰、其通ニテハ扱ハ不可成ト云ニ依テ、十一人ト論ニ成、過言ニ及。伊織噴テ十一人ヲ押へ鎮ル。四郎右衛門ト十一人儀絶（ママ）シテ退去ス。

此事、伊織悔ミテ、同国隣郷、林田建部内匠殿へ右ノ通ヲ申達シ、御出被成、御扱不被下事ヲ願。内匠殿、早速ニ御出ニテ、四郎右衛門ニ被仰談扱ニテ、四郎右衛門ト三人ト十一人と和談ニ及、静謐ス。六右衛門小頭、三郎兵衛小頭、追放ニ成。然ドモ、家中不静。十一人思慮シテ、右ニ四郎右衛門ニ対シ、過言ノ後難ヲ悔、並、菅友伯ガ忙奸ヲ妬シ、右兩人ノ下知ニ順フ事ヲ無益ニ思、四郎右衛門・友伯ヲ退ケ、伊織ヲ用シ事ヲ謀ル。因之、家中、大分ニ伊織方ト

時計・めがね・宝石

津村時計店

中央通り・☎②0355

究、家中ニツニ分ル。後ニハ、傍輩、互ニ無言儀絶  
(ママ)ニ及ブ。

菅友伯コト、昔日、秀頼公ニ儒者ヲ勤テ存庵ト云。  
大阪ノ後、本田(ママ)美濃守包政(ママ)殿ニ奉  
仕ス。後ニ牢人ト成。輝澄公ノ局ノ甥タルニヨリ出  
入シテ奉仕ス。

伊織事、伊木清兵衛二男。是モ本田美濃守殿ニ奉  
仕シ、後、牢人ス。友伯、古傍輩ニ依テ輝澄公ヘ取  
持、三千、輿力十騎五百五十、鉄炮三十人預ニテ相濟。  
此由緒ヲ以テ入魂也。後ニ、故有テ疎遠ニ成ル。

小河四郎右衛門事、大坂陣武功有二依テ三千石ニ  
鉄炮三十人預ニテ奉仕ス。

山崎家中、甚騒動ニ付、備前光政公悔テ、牧野能  
登等ヲ以テ御異見有テ曰ク、友伯コト、暇ヲ遣サル  
カ、此方預カ、並、四郎右衛門コトハ武功有ル者、  
自然ノ事ニ用、職ヲ許シ、伊織コトハ今迄ノ通ニ職  
ヲ勤心、家中静謐成ベシ、トノコト也。輝澄公承引ナ  
シ。光政公再三ニ及、御承引無之ニ於テハ、向後  
不通トノ事也。輝澄、弥承服無ニ依テ不通成。輝澄通  
光政ヨリ徒。  
ニテ通路ニナル。

然ル処、徒党ノ者トモ、止事ヲ不得シテ暇ヲ乞、  
立退形勢ナリ。四郎右衛門、徒党ノ者トモ、御旨ヲ  
不請、立退ニ於テハ、打捕ンコトヲ輝澄ニ窺事再三

ニ及ニ依テ、輝澄公思惟有テ、四郎右衛門ヲ江戸ヘ  
呼寄、江戸ヲ勤ム。輝澄公、冲右馬丞ヲ使トシテ山  
崎ヘ遣シ、堪忍仕、可留事ヲ命ズ。右馬丞申上ル御  
旨ヲ不請ニ於テハ可打事ヲ窺。仰ニ、不請者、其通  
ニ仕リ、早速可帰コトヲ命ゼラルル。右馬丞、山崎  
ニ至リ、御旨ヲ伝フ。弥不請シテ、極月廿日二十一  
人立退。同廿一日惣退、上下トモニ二百余人。伊木  
伊織、明ル春ニ至リ、立退。江戸ニテモ、伊織方、  
同日立退。

寛永十七辰八月、從御公儀、山崎家中公事ニ付、  
立退ニ依テ御僉儀ニ成。立退公事人ヲ召。

伊木伊織、石丸六右衛門 小川三郎兵衛  
並十二人。

山下 庄右 衛門 杉谷 太左 衛門 宇津 孫右

**新才会ピアノ教室**

山崎町庄能119の11  
電話 ② 3 6 8 6

書道用品・結納用品

**志水成文堂**

山崎町さつき通り1丁目  
電話 ② 0547・4305

衛門 鈴木平右衛門 山本喜右衛門 寺  
 西忠左衛門 山脇久左衛門 太原久右衛門  
 名倉喜左衛門 丸山忠兵衛 黒川徳左衛門  
 此方ヨリ御評定所ニ出ル者。

小川四郎右衛門 別所六左衛門 菅友伯  
 横目 牛尾四郎左衛門  
 右、日限究、両方出ル。

小寺八郎右衛門ト云者、御評定所ニ出ル。取次ノ  
 曰、書付無之由ヲ云。八郎右衛門ノ曰、山崎公事ノ  
 節、横目役仕ル。公事ニ付、御尋ゴト可申上ニ付、  
 出之由。取次、則、八郎右衛門口上ノ趣、御老中へ  
 窺フ。御老中、召無之ニ出ル者、曲事成。則、伊豆  
 守殿、御出被成、直ニ八郎右衛門、其方宿云付ヲク  
 也。直ニ御下知ニテ、御預ケ、追付切腹ス。列座ノ  
 者、驚怖ス。

右、両方対決ニ及。別所六左衛門、石丸六右衛門、  
 小川三郎兵衛、公事ノ始終ヲ訴フ。伊織曰、右之公  
 事可済ノ処、四郎右衛門、六左衛門荷 仕ルニ付、  
 騒動ノコトヲ訴フ。四郎右衛門曰、右ノ公事破ルト  
 云ヘドモ、建部内匠殿御出被成、扱ニテ一度相済和  
 談ニ成。然ドモ、家中、徒党ヲ結、主命ヲ背、立退  
 コトハ如何。伊織、返答ニ不能シテ、唯、友伯  
 ヲ以テ主君ヲ掠メ、依怙ノ我儘ヲ仕ル者也。並、友

伯、或時、讃岐守殿ノ御名ヲカリ、謀書ヲ伊織ニ遣  
 スコト有。此書状ヲ、伊織懐中ヨリ取出シ、指上ル。  
 各御被見ニ及。讃岐守殿、御覧ニ及、御立腹ニテ対  
 決終ル。

六左衛門・六右衛門・三郎兵衛、此三人ハ公事  
 ノ元一度相済ニ付、御預ケ。

伊織事、家老ノ身トシテ徒党ヲ結、立退ニ付、  
 切腹。

十一人ノ者、主命ヲ不請、徒党ヲ結、立退ニ付  
 切腹。

四郎右衛門事、家老トシテ六左衛門ニ荷擔仕ル  
 ニ付、御預ケ。

菅友伯事、謀書仕ルニ付、斬罪。  
 牛尾四郎左衛門、横目何ノ御構モナシ。

輝澄  
 へ被  
 仰渡  
 ル。

食料品一切卸問屋

③ 寺田商店

山崎町紺屋町・☎②0005

---

和洋酒・食料品

城内商店

山崎町東鹿沢・☎②0369





惣領虎之助病氣不申上事、  
家中仕置悪キ 騒動之事、  
一門之異見不聞事、

右三ヶ条ニ依テ、領知穴栗郡・佐用郡ヲ被召上、  
同国ノ内神東・神西之内一万石被下、松平相模  
守ニ御預ケ。因州ニ參テ鷹ヲ楽ミ可仕由、被仰  
渡ニテ、一家、因州へ下向。因幡ノ内、鹿野ニ  
居住。昔、亀井武藏守殿古城ノ跡、則、刺髮、  
石入ト号ス。

## 史跡

### 鹿沢城跡保存と

### 公園計画について

堀 口 春 夫

山崎町が城下町として整ったのは、一六一五年元和元年池田輝澄（松平石見守）が領主として入部し鹿沢城を築いて城下の町造りをした事に始る。其町の誕生を記念すべき鹿沢城が明治維新を迎え、廃城となって既に百有余年、今は其面影すら止めていない有様である。明治六年新政府によって城取

毀し令が出された時は、大手門と搦手の裏門と埋め門の三つを破壊して其令に答えたが、当時何れの藩でも費用が無く申訳的に門つぶしをやって後は自然消滅を待った。中には潰し値で身売した城もあった。山崎町では明治十四年頃から城下村へ通ずる新道路計画が開設され、城の土堤や石垣を崩してその埋立に使った。その頃から外堀が漸次埋められ、中堀は半埋で一時水田になっていたが明治末年実科女学校が出来る頃には完全に埋められ民家が建った。内堀は大正から昭和にかけて山崎町のゴミ処理場となって漸次埋められて行き、今日城の遺構は紙屋門唯一つとなった。明治初年以來城跡が小学校となって、必要に応じて其都度消滅して行った事は致方無いとして、近年史蹟の文化財意識が高まり城跡を復元して文化的遺産を後世に残す運動が全国で盛んに起り昭和三十年代は築城ブームを巻き起し城下町の半数以上は昭和の築城で復元された。最近隣りの竜野城も今やっている。山崎町でも郷土研究会では此の記念すべき鹿沢城跡の消滅寸前に歯止めをかけて、史蹟部では文化財意識を高める為石柱を建ててゐるが、先立つ物が無いので此の程度に止どまっている。処が最近山崎城本丸跡を城跡公園にとの提案がなされ、本丸周辺を城跡らしく整備して内部をぼつぼつ公園に仕立て行くと云う結構な案が出され、改めて史跡を見なおす郷土民の暖い心のゆとりを感じました。

## 美術・工芸・画材 いとう画廊

山崎町出水町通り  
☎ ② 0371

何処の城下町でも城跡が史跡として温存されている所は必ずと言って良い程公園となつていている所であつて城跡の保存には公園が最もふさわしい事を物語つています。処で今すぐ公園と言つた処でそれは不可能であつて、プール有青年の家有図書館有講堂有では公園の企画条件にも合はなく、長い期間を

かけて漸次公園化して行く外はなく、今すぐ手をつけられる所は周囲の整備以外にはない。処が最近城下の桜之馬場駐車場からの昇降口として歩道が計画され埋め御門の復元の話が持ち上つて来たのは幸ひである。前号の会報に前田重孝議員の提唱されていた記事がそれである。未だ具体化はしていないが、それに先立つて埋め門発掘調査が此の夏から初められ、結論は出ないまでも矢倉門の一方の石積が発掘されてほぼその位置が推測されるに至つた。調査は終つても、これを元の様に埋め戻すのは如何なものか？ 折角骨折つて発掘したのに何とか、序に昇降口の歩道と埋門の基礎だけは石積みしてはと私は思ふ。これを具体化するにはやはり建設委員を組織して、城跡公園歩道促進運動を起こさねば早期実現は望めないと思はれますので、何卒有力な方々で建設委員を組織し

て計画実行にあたつて頂き度く念願する次第であります。

## 源が谷山崎焼

### 最後の陶工

那波鳳翔 (相生焼作家)

山崎町上之町の紅葉山と軍人墓地との間、源が谷に通称茶碗山と称する窯元が有つた。幕末から続いた山崎焼(源谷焼)最後の老陶工が住んだ小屋があつた。その名は、村本作一(佐市)。作一は、明治十年十一月、今の島根県江津市(郷田村)の、村本半吉の長男として生れた。父は九才で死別し、母ひさの手で育てられたが、生活が思うにまかせず、叔父村本嘉市のもとに身をよせて働いたが、その叔父も早逝するという幼時から生活の苦労をなめた日々をすごしていた。石見焼窯元の一つに奉公に入り、一人前のロクロ師としての腕をつけてから、日本海のほとりの町に母をひとりのかし、出かせぎ陶工として備前伊部の窯場で数年の間働いた。作一が伊部で働いている時、播州の山崎焼窯元坂根栄次郎(栄太郎)に引きぬかれ、山崎の町にやつて来、旅の空に江ノ川を思いうかべながら、ついにこの地を、一生のすみかとする事になったのである。

「兵庫のやきもの」の著者青木重雄氏は、かつて神戸新聞にペンをとつておられた頃、山崎焼のはじまりについて、昭和四十年頃の紙上に次のような紹介をしておられる。『源谷焼（山崎焼）は、「工業調査彙報」第十三巻四号によれば、「幕末の創業で、ツボ、花びん、その他日用雑器を焼いた」とある。

江戸末期の山崎藩主本多忠隣は、風雅を愛した文人趣味の名君であり、陶工栄次郎が、源が谷に開窯したいむねを聴いて喜ばれたにちがいない。しかし風雲急を上げはじめた幕末とあれば、時代が悪い。竜野野田焼が開窯した寛政年間とちがつて、藩からの授産指導はあつても財政的援助を得るのはかなりむずかしかつたことである。登窯は、五室前後の規模で、北へ登る山道から東の竹林へ直角に登り、その北方に平行に並んで素焼用小窯が築かれていた。道の西側に陶房と住いがあり、窯南に助手の住居があり、道を北に登った所、つまり素焼窯から約十五米ほどの細い平地に窯たき用の仮眠小屋兼物置場があつた。そしてこの仮眠小屋が、山崎焼三代目にして源谷系最後の陶工作一の終焉の住いとなつたのであつた。初代陶工栄次郎は明治の新しい時代になつて、坂根姓を名のつた。初代栄次郎は、明治二十二年六月に世を去つたが、二代目もその名を用いて坂根栄次郎を称している。若く美丈夫だつたといわれる村本作一が源谷窯へ

やとわれたのは明治三十年代のように思われる。坂根栄次郎には男子がなく、作一は娘と結ばれて、三代目として山崎焼をつなぐなりゆきとなつていった。義父の二代栄次郎は、明治四十三年五月に世を去り、三代目となつた作一は、この後、本名の佐市をすて、ただ一すじに作りゆく名「作一」を名のるようになった。ふるさとを恋うてか、あるいは引取らねばならない事情があつてか、明治四十五年三月に、生れ故郷の郷田村から蔵本仙助三男で当時七才の助広を養子に迎えている。しかし作一の妻は昭和四年に世を去っている。助広は成人後、小泉さく（明治二十五年生）をめぐり、父とは別の職業に就いたために作陶は出来なかつたが、窯たきは名手で父を手伝つて松割木をなげこむのがうまかつたという。そのため、近くの父の親友猪尾氏の瓦窯たきをたのまれる時もあつたという。

父よりも更に美男子だつたが腺病質な助広は、昭和二十五年、四十五才にて、父より先に世を去つた。妻さく

純喫茶

エンゼル

山崎町山田・☎②0909

毎日の健康に  
玄米入食パンを!!

松原商店

中央通り・☎②0077

は、主人より長生きし、茶華道の師匠をして山崎のあたり  
りに多くの子弟をのこしている。一子美耶子は結婚して  
今も健在である。

源谷窯の作品は、窯址陶片調査と伝世作品調査により、  
左のようなことがいえる。まず作品であるが、古作の方  
がロクロの腕がよくかれて洗練されている。かぎられた  
同じものだけを作ったからであろう。作ゆきは、他の西  
播の土もの雑器窯と、ほぼ同系で、同じく古作は無印で  
ある。古作と見られるものは、中鉢、徳利、すり鉢、し  
お董など、ほとんどが雑器そのものであり、作一の代に  
なつてから、かてて加えて茶器、花器など雅陶がふえて  
来ているようである。初期は、はだかのてんびん焼きと  
想われるが次第にサヤ焼きをするようになっていく。土  
は近在の白色、黄色粘土を用いており、源が谷の作業場  
まではこび上げて、珪石小つづを含んだ荒土のままや、  
粘土の良い所どりでそのままのものや、水ヒした土で作  
つたりしている。窯址調査のおり、残土を少し発見した  
ので製土し、茶盤を作ってみたところ、耐火力は相生辺  
にも似た土があり、のびのよい土だった。相生浦窯中は  
だに変化の出やすい場所に入れたが、窯変はかなり出に  
くい土のようであった。高台けずりの時は、西播土とし  
ては、ちりめんじわの出やすい土だった。ところで、野  
田焼や相生焼（那波仁清、古池）は、土灰透明釉が主流

であるが、山  
崎焼は反対に  
鉄釉系の黒ま  
たは伊羅保系  
の上ぐすりの  
ものが六十％  
以上をしめて  
いるだろう。  
わら白釉やタ  
ンパン緑をちらしたものもある。また作一の代では、焼

しめものも少量だが手がけており、本人もそれを自慢し  
ていたようである。先ほども申し上げたように、古作の  
ものは無印であるが、二代坂根の晩年あたりから、雅陶  
に關しては陶印を入れはじめたようである。小判形わく  
又は角わく中に「源谷」と漢字で入ったもの、行書で、  
『源谷焼』と釘彫りして別に丸の中に「不」の字を彫つ  
たもの。作一の助手陶工山口義勝の彫銘を入れたものな  
どが知られている。北川智恵女史の御世話で、今は幻と  
いわれて数奇者がぜひ手に入れたいという山崎源谷焼の  
所有者を調査したところ左の方々の秘藏品を眼にするこ  
とが出来た。北川智恵、小嶋千代子、嶋本つや子、杉岡  
光子、前田恵子、山本遼の各氏である。西播州一帯で江  
戸から明治へかけて焼かれていた土灰釉、鉄釉雑器など

和洋酒食料品販売

八百福商店

山崎町山田・☎②0413

和洋酒食料品 卸問屋

三輪又商店

TEL ②1173



# 株式会社 安井書店

宍粟郡山崎町山崎90  
☎ 山崎②0700(代)

作品目的が同じで、もう一つ古くて大規模な窯場として江津一帯の石見焼は全国的に有名である。だからその出身の熟練陶工村本作一は、源谷窯にとって、願ってもない人材だったにちがいない。

作一のような石州陶工に關して江津の石見安達美術館の方は、次のように語っていた。「雑器で山陰では牛ノ戸の徳利などが有名ですが、それはずっと後世のことで、す。なんといいっても石見一帯の雑器窯がその大もとで、そこで腕をみがいて育った次男三男の陶工たちは九州、萩、宇部や備前など、方々へ出かせぎ陶工の旅に出、いい仕事をしたものです。美術館内には、そういえば、西播雑器と同じ手法の仕上げや釉薬の徳利が色々と並んでいたのが印象的だった。作一は、ひと年いっても、作った陶器を近隣のせともの屋にもおろし、山口義勝を助手

に、実に調子よく作陶をつづけた。実に調子よく作陶をつづけた。充実の日々だった。しかし窯たきがうまかった助平が先にこの世を去ると、急にからだの力を失い、ついに経済的理由でもあろうか義勝も陶房を去ってしまった。こうなると、とつくに七十をすぎた一人身陶工では、製土作業一つをとっても腰がつっぱるほどの重作業

だし、松割木はこびも大変なことだし、大きな登窯を満たすだけの数の陶器を作ることも思うにまかせない。ましていくら無茶な早だきにしても一人なら二昼夜は不眠不休でたかねば焼けないし、ついに自然消滅的に窯を見すてなければならぬ日がやって来た。作一はもともと好きな酒に、ますますのめりこんでいった。人の住まなくなつた家と同じことで、放置された登窯はまず屋根がくされ落ち、荒れるにまかせて湿つけて、葛がからみ苔むし、やがてくずれけるけはいを見せはじめた。そこには今までに売残した陶器を小わきにかかえ、ポロポロ売りで生活をしのぎ、また酒をあおる作一老人の姿があつたという。

源が谷の仮眠小屋で、中風のために不自由になりはじめた体を横たえ、窓外に流れる雲を眼で追う作一の脳裏にうかぶものは、何であつたらうか。陶工の道ひとすじに生きた作一。それ以外はすべて、親しい人達との早すぎるこの世の別れと、旅空の孤愁だった。西に流れる雲のはてには、ふるさとの江ノ川がある。大崎ノ鼻には日本海の荒波がうちよせていることだろう。しかし幼時をすごした郷田村は、もう今では遠い昔。そこには、知っている人影もほとんど旅立っていないはずである。

昭和三十四年のこと。息子の妻さくが六十七才で世を去った同じ十一月に、村本作一はすぐ後を追うように八

楠風閣式場指定店  
 楠農協会館

## 婚礼出張 堀口写真館

山崎中央商店街・☎②0934

るまい。

### 続山崎

# 昭和年譜

堀口春夫

十二才の生涯をとじた。もし作一が他の有名窯場で生きたなら、死後口の端にもものぼることのない、その他大勢の中の並職人として消えていっただろう。しかし今日になつてみれば、旧山崎焼最後の陶工として生きぬいた事実こそ、村本作一の人生にのみ付された最大のいさおしであつたといわねばな

昭和三十九年 戸倉スキー場暖冬異変でお手上げ 一

月中国縦貫高速道路インターチェンジは山崎通過に確定す、四十三年開通の見込  
 二月八幡神社奉賛会結成される。これより絵馬殿と結婚式殿建築が計画さる。故  
 吉川英治夫人来崎、閑斎神社参拝、三月  
 高校学級増も何のその終戦後ピーク児が

### 昭和四十年

進学となり相変らず狭き門、定員七五〇人に対し本年志願者一〇五九人、入試の結果三〇九人落される。四月県立伊和高等学校独立す、五月最上山経王堂本殿と拜殿落慶す、六月山崎自動車教習所開所式、技能免許山崎で取得出来る、七月播磨山崎郵便局山田に竣工移転す、ロータリークラブより最上山に非常用報知スピーカー寄贈さる。八月十二日波に落雷中  
 学生感電死す。十一月山崎西鹿沢に郵便局新設、美術協会結成後初の美術展下村記念館で開く。

二月山崎ライオンズクラブ誕生す会長村上彰治氏就任、山崎簡易裁判所新庁舎完成す山崎今宿に、三月重たいミソレ雪降つて山林大被害、四月山崎中学校体育館落成す、本多記念館閑斎屋敷へ移す、五月山崎八幡神社楠風閣竣成絵馬殿と結婚式場が建つ、宍粟の黒牛漸減、十年後には動物園でしか見られなくなりそう。七月山崎町合併十周年記念式典行ふ、小学校庭で自衛隊の装備展示、音楽隊演奏会  
 ミス山崎発表会、NHKのど自慢など催

## 昭和四十一年

す、九月ライオンズクラブ認証式が山中体育館で開催近畿各府県のライオンズ会員八百六十名参集盛大に行ふ、催しとして本多家宝物等展示し歴史的な山崎町を紹介す。十月全国いっせい国勢調査、結果人口は産業都市に集中し農山村は次第に減少傾向、山崎は五年前より二千六百八十八人減、国道二十九号全線改修の終る四十一年度を期して姫路鳥取間の省営バス運行の陳情運動に町長会のみならず、車の激増に駐車場の設置運動起る、十一月川戸山テレビ塔完成超短波中継放送で各民間放送が見られる。元鹿沢城本丸跡を文化センターに計画、十二月山崎八農協の統合計画成る。

農協合併成立、村上元町長急逝す、ライオンズ葬盛大、山崎中央通商店街協同組合として発足す。二月山崎文化センターに郷土館完工す。内部乾燥と展示ケース準備の為文化財展示は延期、図書館文化センターに移転す、山崎町本町にアーケード完成す、西播磨農乳牛共進会開く、交通事故増大し自動車走る兇器と化す、

## 昭和四十二年

交通取締りいっそう厳重となる。山崎商工会館横の駐車場有料となる。十二月一日山崎町真昼の大火、飛火による類焼多数一日昼過ぎ火災予防週間のさ中大才町木工所工場から起った火事が隣接製材所に燃え移り折柄北西の風強く猛烈に火の粉を吹き上、はるか今宿に点在する民家葺屋に点々と燃え移り類焼十一戸さらに河東高所の民家にまで飛火し大火となる。町役場早速災害対策本部を設け罹災者救済に乗出す。

一月山崎消防団県より優秀消防団の表彰旗を受く、一月衆議選挙有、宍粟信用金庫姫路竜野方面に進出、新産業都市と宍粟の経済交流す、四月郷土館開館、旧藩主本多家の遺品を始め八幡神社宝物、開斎座像等歴史的な文化財多数陳列、名士多数招待して祝典を開き県下でも珍らしい郷土館となる。五月博愛病院本館竣工す、病床七十二床冷暖房完備、六月掛保川流域を国の直轄河川に編入、一級河川に昇格、山高大学進学率優秀となる。町の中心が東南へ東南へ形を変へる山崎町、六

## 昭和四十三年

月どつと押しかけたさつき展十万の人出で町賑ふ、漆芸写真展共催、上寺に山崎町火葬場改築成る。八月山崎町議選挙戦炎熱下に展開、井口光司氏無投票町長再選す。十月天衣無縫の評論家大宅壮一新潮会の招きで来崎講演す。十一月第三回美術展開く、山崎町住民の平均所得一人当り年間十三万二千元、商工業者の伸は約倍に近い。

二月政治団体修政会新しく生れる。下村記念館に創立総会、河本代議士講演す。明治百年を記念し生野選挙の志士美玉中嶋両士の追慕祭を下村記念館に於て盛大に行う。

国道二十九号線改修舗装完成す。自家用車急増す、六月山崎町立幼稚園増築落成す。老松酒造二百年史発行さる。十二ン波ホテル狩、観光協会商工会青年部主催で農協前で音楽会、交通事故多発に農協救急車を寄贈運転す。七月山崎町シンボルの町花「さつき」決定す。立正信用組合山陽信用組合と改称す。八月電報電話局地上五階地下一階の宏壮ビル座

## 昭和四十四年

沢に建つ、播磨山崎電話局ダイヤル式切替。人口三万でも市に、行政面の格差是正へ、新市制実現の夢を追う期成同盟会、十月山崎祭恒例の子供御輿の外今年より商店街団体が参加、仮装行列や手踊流し盛大、中央通明治百年仮装行列出す。聖イエスペテロ教会今宿に建つ。十一月山崎町立養護老人ホーム五十波に落成開所、文化の日山崎町民憲章を制定発表、講師庄静夫先生、十二月山陽運送新宮営業所城下に竣工移転す

河本敏夫氏郵政大臣となる。山崎町四十四年度予算額七億一千万円の超大型予算となる。中国縦貫道路鹿沢以西の路線決定、関電山崎営業所落成、NHK今日は奥さん五代利矢子女史来崎、三万人の主婦と会って、を語る。六月山崎名物鮎釣再現五十波に特設釣場設定、宍粟郡の奥

## 漢方薬と食事指導

ドラッグストア  
ひがしや  
有限会社

山崎町中央通り・☎②0109



鮮魚・料理仕出し  
**中村鮮魚店**  
 山崎町中央通商店街  
 電話 ② 2468 (代)

カット&パーマ  
 婚礼着付  
**水川美容院**  
 山崎町役場前・☎②0590

昭和四十五年

地次第に過疎となり、繁盛黒原分校遂に閉鎖、山崎ライオンズ下村記念館へピアノ寄贈、新富座魚菜市场となり山映館はポルノやくざ映画のみとなる。一宮町富士野峠開通す。十月修政会館起工式と河本大臣を囲み政治懇談会を開く。山崎美術展公募展とす。日本電気山崎に誘致須賀の四千五百坪の敷地に建設着工、十二月開斎先生三五〇年祭盛大挙行京都より出雲路敬和氏招き崎門学の講演を聞く詩吟剣扇舞有。

安富の千年家解体復元出来る。婦人会愛の餅寄運動続けて本年二十年、東レ系被服メーカー河村商事山崎工場田井に進出

す。県文化センター誘致か町民グラウンド先決か論議される。修政会東鹿沢に完成す。二月旧藩主元子爵本多涉氏帰郷さる。

三月万国博覧会大阪千里山に開かれる。米の生産調整に県から町村末端農家へ、減産量が割当てらる。農家とまどう。播磨観光レジャーセンターとして安富町張切る。郷土発展について修政会小川登氏大いに語る。四月最上山に山崎小唄の歌碑建つ、四月岡崎藩主本多忠承氏を迎え本多家大法要を営む。後本多氏を囲み郷土研究会座談会を開く、兼業農家夫婦共稼にかギツ兎増える、三ちゃん農業始る。

五月山崎町庄能に農協会館竣成す。近年産業の発展と反比例して掛保川の水にとり名物の鮎激減す。レジャーブームに乗って千種川グリーンライン脚光を浴びる。

六月老人大学かしわの学園開校す。八月台風十号に河川氾濫道路欠壊、橋梁流失山崩れ等山崎被害甚大、九月室内スポーツボーリング場山崎今宿にオープン、十月国勢調査の結果山崎は人口減、山崎安富両町合わせても三万に満たず市制の夢破る。昭和元禄山崎祭、商店街仮装行列流し、天と地阿波踊等お祭り気分盛ん、十一月県知事選挙坂井新知事誕生、山崎

木材市場須賀沢に移転新築。

# 史跡部だより

昭和五十五年度の史跡指定は、役員会で次の所が決定いたしました。四月には標識を建設したいと思っております。

## 一、山崎城外堀の跡

(本鹿沢聖旨保育園の東北隅に)

五十四年度に建設予定でありましたが、予定地の都合により一年延期致しました。

## 二、長水城跡

(宇野の長水城登山口の標識付近に)

長水城はかつて要塞堅固の山城で、本城内では最大の城主であった広瀬氏や宇野氏の居城でありましたが、羽柴秀吉の中国征伐により、天正八年五月に落城しましたことは、多くの方々をご存知のとおりであります。

## 三、山崎藩大庄屋庄氏屋敷

(高下の庄氏宅付近に)

山崎藩一万石の領内には、各部落に庄屋があり、その上に大庄屋が三人ありました。それはすなわち庄氏の他段の松井氏、神谷の栗山氏でありました。

## 四、須賀代官屋敷の跡

(出石の関西電力KK独身寮入口付近に)

山崎町内には須賀・三谷・清野・中野・上ノ・小茅野が天領でありましたが、郡内には尚波賀町・千種町・三方谷・三河その他多くの幕府直轄地がありました。それらをとりとまとめたのが須賀代官所であります。

最近関電の独身寮が新築されましたので、このたび標識建立については、三津の田中市郎氏のご尽力により、建設経費は関電で寄付していただくことになりました。紙上をお借りして関西電力KKならびにご斡旋下さいました田中市郎氏に心から御礼申し上げます。

以上

# 山陽興産株式会社

## 山崎事務所

山崎町鹿沢33番地  
☎②0466・②0883・②5889